

■日本の登山史（黎明期～戦前）

年	出来事
1888 年（明治 21）～ 1894 年（明治 27）	イギリスの宣教師ウォルター・ウェストンは第一回滞在のこの期間に、飛騨山脈、赤石山脈を登り、ロンドンで『日本アルプスの登山と探検』を出版した。
1894 年（明治 27）	志賀重昂が『日本風景論』を出版し、「登山の気風を作興すべし」と力説した。
1905 年（明治 38）	イギリスの宣教師ウォルター・ウェストンと、地理学者志賀重昂の教示と影響により、直接的には小島烏水、越後の豪農高頭仁兵衛、日本博物学同志会の武田久吉、河田黙、梅澤親光、高野鷹蔵、山草会の城数馬らの熱心な運動により、この 7 人が発起人となり、日本山岳会が設立された。
1907 年（明治 40）	陸地測量部測量官を務めた陸軍 技師 柴崎芳太郎は、山案内人の宇治長次郎、助手の生田信らと共に未踏峰とされてきた劔岳登頂に成功し、山頂で修験者が遺したと考えられる錫杖の頭と鉄剣を発見した。
1909 年（明治 42） 夏	吉田孫四郎らの越中劔岳登山、鶴殿正雄の穂高・槍初縦走、小島烏水の赤石山脈縦横断などにより日本アルプス探検の黄金時代を迎える。
1910 年（明治 43）	小島烏水『日本アルプス』全 4 巻（1910～15）を出版した。
1911 年（明治 44）	オーストリアのレルヒ少佐が広めたスキー術が本州では高田を、北海道では札幌を中心として広まる。
1913 年（大正 2） 年 1 月	鶴見大尉一行が富士山のスキー登山を行った。
1916 年（大正 5 年）	松沢貞逸が白馬尻小屋の営業を開始する。
1918 年（大正 7 年）	穂苅三寿雄がアルプス旅館（槍沢小屋）の営業を開始する。
1919 年（大正 8）～ 1921 年（大正 10）	スイスの山々で本格的な登山を行い、アイガー東山稜の初登攀に成功した槇有恒が帰国し、日本の若い学生登山者の間に、ピッケル・ザイル・アイゼンなどを駆使したアルプス的な登山を広め、槍、穂高、劔岳などが登られた。
1920 年（大正 9）	「水平歩道」（水力発電用ダム建設目的で作られた黒部市の樺平から仙人谷まで、黒部川上流沿いに約 13 km にわたって延びる歩道）が開通した。
1924 年（大正 13） 年 6 月	藤木九三、榎谷徹蔵、水野祥太郎、津田周二中村勝郎らが日本初の岩登りと雪山登山を専門とした社会人山岳会（RCC:ロック・

	クライミング・クラブ) を神戸に設立した。
1925 年 (大正 14)	藤木九三は日本初のロック・クライミング技術解説書『岩登り術』を著し、同年 8 月に北穂高滝谷の初登攀に成功した。
1928 年 (昭和 3 年) 頃～	加藤文太郎が単独行で日本アルプスの数々の峰に積雪期の単独登頂を果たす。槍ヶ岳冬季単独登頂や、富山県から長野県への北アルプスの単独での縦走によって、単独登攀の加藤「不死身の加藤」として一躍有名となる。
1928 年	浦松佐美太郎がヴェッターホルン南西稜初登攀する。
1930 年 (昭和 5)	山岳雑誌『山と溪谷』が創刊され、相次いで『山と旅』、『山小屋』、『ハイキング』などが発刊され、全国に登山ブームが起こる。
1930 年 (昭和 5) 3 月～1932 (年昭和 7) 1 月	堀田弥一ら立教大学山岳部は、唐松岳～白馬岳・槍ヶ岳～奥穂高岳など主として積雪期の縦走登山に実力を発揮し、1936 (昭和 11) 年のナンダ・コット (6,861m) 初登頂に結実する。
1931 年 (昭和 6) 年	清水トンネルが全通し、谷川岳は夜行日帰り可能な山となった。
1936 年 (昭和 11) 1 月	加藤文太郎が数年来のパートナーの吉田富久と共に槍ヶ岳北鎌尾根に挑むが、猛吹雪に遭い天上沢で 31 歳の生涯を閉じる。
1932 年 (昭和 12)	新田次郎 (作家) が中央气象台 (現：気象庁) に入庁。富士山観測所に配属される。
1939 年 (昭和 14) 12 月	登歩渓流会に中学生で入会した松濤明は、17 歳で北穂高谷第 1 尾根の積雪期初登を果たすなど若くして先鋭的な登攀を実践。しかし、1949 年 (昭和 24) 1 月に有元克己と槍ヶ岳北鎌尾根を縦走中に遭難し、名著『風雪のビバーク』を遺す。